

ISBC(国際中小企業会議)を台湾で開催

「第36回ISBC(国際中小企業会議)台北大会」が10月27日、台湾の台北市と高雄で6日間にわたって開催された。世界62カ国から約8500人が参加。日本からは中小企業関係者ら62人が出席し、各国の中小企業の現状や政策などを討議、交流を深めた。

メインテーマ

新たなチャンスと 未来に向けて不安定な 時代を乗り越える

ISBCは、政府や前会合が開かれた。事学会、中小企業支援機関前会合が催されたの。中小企業者などは、36回にわたるISBCの会合で初めての意見交換、研究成果の報告、討議を通じて世界の中小企業の発展に寄与することを目的に、1974年より開催されている。日本では、ISBCの参加窓口として、日本中小企業国際協議会(事務局)独立行政法人中小企業基盤整備機構)を組織している。

同会議は、10月4、7日に台北市で行われ、それに先立ち2、3日、高雄市主催で事

地からの多くのベストプラクティスや、さまざまなテーマによる意見交換を総括して、「ISBC2010大会宣言」を採択。中小企業の役割と中小企業政策の重要性は、世界の共通の価値と合意が進んでおり、中小企業は地域経済、グローバル経済の健全な成長をけん引するエンジンであることを確認した。

日本の中小企業が事業 承継・イノベーション 事例を紹介

「中小企業の移り変わり」を討議する分科会では、原田伸鋼所の持つノウハウの承継でもある。後継者がリーダーシップを発揮でき、交代と事業承継について体験を通じた自身の考えを述べた。同社は現在、原田社長が会長を務める二人の代表が難しい。親族経営が否かに関係なく、創業者

「中小企業の移り変わり」を討議する分科会では、原田伸鋼所の持つノウハウの承継でもある。後継者がリーダーシップを発揮でき、交代と事業承継について体験を通じた自身の考えを述べた。同社は現在、原田社長が会長を務める二人の代表が難しい。親族経営が否かに関係なく、創業者

古川社長は、独立行政研究所の所属。同社は研究開発ベンチャー企業と締めくくった。

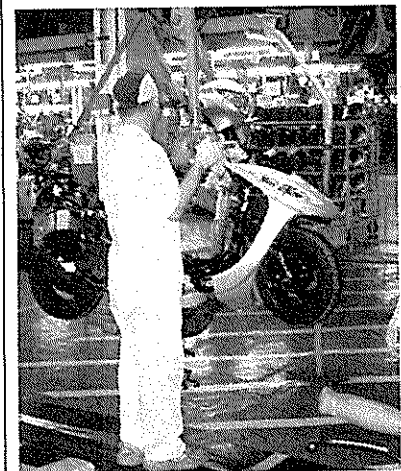
和田会長は、理化学研究所の所属。同社は研究開発ベンチャー企業と締めくくった。



分科会で活発に議論



展示や視察を通じて、台湾企業の力をアピール



バイク製造過程を企業視察

統的發展のために不可欠なものとして、①社会的共通資本としての安定的金融システムの再構築、②健全なマクロ経済運営、が提起された。来年は、スウェーデン・ストックホルムで開催される。

また、ジャパニーズ・セクション(分科会)で、オキサイドの古川社長とメガオプトの和田会長が、事例を報告した。共に、ジャパニーズ・ベンチャー・アワード(中小機構主催)を受賞したベンチャー企業で、公的研究所で培った自社の高い技術力を生かしたイノベーションの過程を説明した。

政法人物質・材料研究機構の出身。研究成果である高機能で高品質の光学単結晶を育成する技術が、大手企業と連携してもなかなか実用化に至らず、自らベロジェクトを手掛ける。レーザーは、電気や医療、宇宙、農業といったさまざまな分野で実用性が見込まれ、起業の理由を和田会長は日本経済の刺激と話す。しかし、研究と経営の意識の隔たりは大きいと分析。「社員(経営人)となった研究者のトレーニングも必要で、開発の視点だけでなく、大量生産を実現する品質管理やコスト削減にも気を配らなければならない」と企業経営の難しさを語った。